



また会おう、
会えるまで。

うーさー

おじさん

名古屋駅から帰ってくると、地元の無人駅がひどく寂れて見える。ビル、ビル、人ごみ、バスバスタクシーだったのが、たった一時間半ほど揺れているだけで、桜並木と住宅街、畠に畠、また畠。

満員御礼の駐輪場、その八割が放置自転車だから、すっかり景色の一つになっている。自分の自転車を探すのは、きっと宝探しと同じだ。徒歩で駅まで通うから、こんなのんきなことが言えるのだろう。

くまの顔の形をした、ほとんどぬいぐるみの定期入れは、左手を少し後ろに向けただけで居所を知れる。大学二年生、女子、と聞けばギリギリセーフのアイテム、今年で二十歳と聞けば。自分の中では気に入っているから、まだ手放したくない。

ホームにすすめのさえずりが行き交う。黄色い線に沿って歩いてんとう虫がかわいらしい。これから乗る人もいなければ、降りたのもわたしだけだった。春の昼下がり、こんな中途半端な時間、講義を終えてすぐにのこのこ帰る人間が、そうそういないのかもしれない。目を閉じたらそのままひと眠りができそう。深呼吸をして、のんびりと改札に向かう。

ふと、影から人が現れた。白髪交じりのおじさんだ。改札から入ってきて、ホームへ続く階段を重々しく踏みしめている。階段といっても十段あるかないかだけど。そんな申し訳程度のものを、うつむいて、申し訳なさそうに。

十段そこらのてっぺんで、おじさんはわたしを一瞥して、スーツの襟元を正した。

息をのむ。

物音がしなかった。定期券なり切符なりを改札に通せば、ぴ、と鳴るはず。光のない目が脳裏に張り付いて、いくらまぶたをこすっても離してくれない。申し訳程度を降りるのに、異様に勇気が必要になった。もときた場所、おじさんの行き場に振り返る。

おじさんはホームの下を凝視していた。ホームの下、線路。ほうっとゆっくり吐いたため息は、体の毒素を抜いている、ようにも感じられた。

「春は自殺者が多いからなあ」

そう、声が聞こえた。

いくら確認しても、ここにはわたしとおじさんだけ。てんとう虫はいつの間にか飛んでしまったらしい。置いていかれた。踏切が鳴る。喉が焼け付く。ここにいてはいけない。人の終わりを見てしまう。重たい足にありったけの力を込めて、改札を抜け出す。せっかく焦ったのに、駅を出てすぐの踏切にしっかり捕まってしまう。

徐々に速度を落として電車が近づく。クラクションは鳴らない。踏切の叫びが頭に痛い。電車が止まる。ドアの開く音。汽笛。やっぱり誰も降りない。ドアが閉まります、ご注意ください、アナウンス。電車が動く。少しずつ速度を上げていく。

おじさんは……？

線路の向こう側に渡る。恐る恐るホームを振り向く。いない。おじさんは、いない。電車に乗ったのだろうか。飛び降りては、いない、はず。ダイヤは正常だ。

妙に暑い。喉が渴いた。でもなにかを飲んだら、変に軋む胃が余計に渦巻いてしまいそう。駅を背にして歩く。てんとう虫は飛んでいった。おじさんも自らが行くべき場所へと向かった。わたしも、帰る。「ただの春」に、帰る。

あたま

小皿の上に七つ、頭が並んでいる。

体から噛み千切られて、残った頭が並んでいる。七つとも目はまん丸で、叫ぶ形で口を開けている。不気味だ。

スカートがしわにならないように気をつけながら、正座を正す。箸の先で、目玉をつつく。焼かれた銀色が、つややかだった。



日曜日の晩ご飯は苦手だ。

母が仕事で家にいないから、代わりに妹が用意をする。わたしが作っていたこともあった。台所で煙草を吸う父が嫌で、いつしか包丁を握るのをやめた。一つ一つの動作を見張りながら、手伝いもしないのに横から口を出されるのは、気分が悪い。

食べるだけになった今、それはそれで、食卓が重苦しい。さっさと食べ終えて、部屋に戻ればよし。家族全員が食事を終えてから、こっそり皿洗いをすれば、文句を言われないと知った。

晩ご飯にししゃもが食べたいと言ったのはわたしだった。それじゃあちゃんと自分で焼くようになると、母から言っていた。けれどやっぱり、ししゃもは妹が焼いた。居間ではもう食事が終わっている。先に片付けた父と妹は、二人並んでテレビを観ていた。わたしに背を向けて。食事の準備ができたからって、誰も部屋まで呼びにきてくれはしない。

「頭は食べるなよ」

父に釘を刺されたのは、ししゃもを二匹食べたあとだった。

「なんで？」

もちろんわたしは全身食べた。保育園に通っていたころと同じように、一匹は頭から、もう一匹はしっぽから。頭から食べると頭がよくなる。しっぽから食べると走るのが速くなる。欲張りだからどっちもほしくて、何匹かのししゃもを食べるときは、頭からしっぽから、一匹ずつに交互に食べる。二十歳を超えると、すっかり癖になっている。

「なんで頭は食べたらダメなの」

空いている左手でお腹をさすって、聞く。

「今日のはちょっと失敗して、硬いから」

それは歯が弱っている父の意見ではないか。ししゃもはいつもと同じだった。頭も違和感なく食べられたのに。それに焼いたのは妹だ。妹はなにも言わない。まっすぐテレビを睨んでいる。

思うだけで反論できず、わたしは素直にうなづく。どうせなにか言ったって、だったらお前が焼けばよかつただの、親に口答えするなのだ、もっと面倒なことが返ってくる。三匹目からは、頭を残そう。しっぽから食べよう。足をうんと速くしてやるんだ。



「ごちそうさま」

箸を置いて、合掌。バラエティ番組の、頭の悪そうな笑い声が響く。静かに一人、ため息をつく。

使った食器を重ね、台所へと運ぶ。小皿の上には、七つの頭。間抜けな表情をした彼らをしばらく見つめる。気が済むまで見つめて、三角コーナーに放る。「食べると頭がよくなる」不思議なさかなは、たちまちごみになった。

ぐりぐりぐらぐら

栄から名古屋まで、地下鉄での短い道のりを、ねちっこく引っ付いてくるものがあった。土曜日の午後四時半、都会で遊んだお兄さんお姉さんの帰宅ラッシュ。もまれながら乗った電車で、本当にもまれたのだ。後ろから。

今朝はスカートかパンツかでしばらく迷って、パンツスタイルで家を出た。正解になったらしい。鞄か手荷物かが揺れて当たっているだけだと、気にせず本を読んで過ごした。心臓がぞわつくくすぐったさに体をよじり、右に左に数歩動いてみても、わたしが背負うリュックをずらして、後ろをぬらぬら這い回る。姿勢を変えるふりをして、肘で打ったり脛を蹴ったりした。標的にちゃんと当たるように、目だけでこっそり振り返りながら。黒い鞄を肩にかけた、紺の背広がちらりと見えた。

同じ経験をした社会人の友達が、捕まえて駅員に差し出したら思いのほか時間を取られ、一時間半も仕事に遅刻したと嘆いていたのを覚えている。

「示談に持ち込めば二十万円くらいもらえないかなーと思ったのがだめだったわ。数分のための二十万より、やっぱり積み重ねの給料とボーナスだよ」

茶色の髪を耳にかけてため息をついた彼女は、保育園で年少組の担任をしている。

「ドラマや漫画じゃ犯人だけ突き出して、被害者はすぐ帰れるような感じなのにね。テレビはうそがいっぱいだって、子供たちにちゃんと教えなきゃなあ」

夢だけは壊さないであげてね、とわたしは祈った。あれからまだ、片手で数えられるほどしか日にちはたっていない。

これから家に帰るだけだから、一時間半をつぶされたってかまわない。だからといって捕まえるのは気が引けた。ナンパや声かけを堂々とできない男のために、労力と時間を使いたくないのだ。このおじさんも家まで帰れば、家族がいるだろうに。好きなようにしたいなら、奥さんにしてやれよ。冬の冷たさが染みる独身なら……がんばれ。

電車は名古屋に止まる。吐き出される人並みにまぎれて、早足でホームに向かう。これで撒けた、と下ろした肩を、強い力が引っ張った。思わず振り向く。

黒い鞄を肩にかけた、紺色の、ブレザー。

背広じゃなかった。おじさんじゃあ、なかった。

学生だ。高校生だ。

生意気にも鼻から下をマフラーで隠している。目はくりくりと丸い。わたしが高校生のとき、「ぐりぐら先輩」と勝手に呼んでいた、一つ上の男の先輩を思い出す。ぱっちりとした瞳が絵本のねずみにそっくりで、自覚してかそうでないのか、その絵本の展覧会に誘われたこともある。

なにか言っている。マフラーで声がくぐもっているのと、電車が発車したのと放送がかかっているのとで、まったく聞き取れない。腕を組もうと伸びてくる手を叩き落しながら、地上へ急ぐ。何度も繰り返しているうちに、だんだんとくぐもった言葉がわかってきた。

「痛いなあ」

ちっとも痛そうじゃない。のんびりした口調と声も、絵本みたいだ。

乗り換えのためにＪＲ線の改札に飛び込むと、さすがにねちっこい手は離れていった。

受験ノイローゼかいじめのストレスか家庭に問題があるのか、好きだった女の子にふられた腹いせか。絵本の主人公の顔をして、手馴れた性犯罪者とは。子供が読むような絵本ではなく、小説の主人公になるべきだ。

まだあどけない大きな瞳を駅員に突き出したなら。二十万円ぽっちで片付くような、安い未来ではないはずなのに、彼はまだ何者にだってなれるのに。その可能性の芽を摘むことになる。ぐりぐりと人生を追い詰めて、ぐらぐらと立ち位置を揺るがせることになる。

夢だけは壊さないであげてね、か。

加工肉と生肉

サザエさんが始まるころ、わたしはふらっと居間への引き戸を開けた。

母は仕事、妹は来年から通う短大の学園祭に行っている。一日中、部屋で寝て過ごしたわたしは、晚ご飯の用意のことなんてすっかり忘れていた。けれど父は覚えていたらしい。こたつのテーブルには山盛りのワインナーと、ありったけの野菜を煮詰めたスープがカレー鍋ごと、ででんと置かれていた。米の炊けるかおりもする。

「出かけてくるから、先に食ってろ。食ったら早く、風呂も入っとけ」

せかせかコートを着て、父まで家を飛び出していった。玄関の向こうで車のエンジンの音が遠ざかる。これといってやることもないし、言われたとおり、食事も風呂も早く済ませてしまおうと思う。

スープをかき回すと、底から豚肉が発掘された。野菜ばかりの中に肉を見ると、どうしてこうも心が躍るのだろう。

いつだか読んだ小説に、「人間も動物だから、肉を見るとかぶりつきたくなる」だか「加工された肉より生肉に手を伸ばすのは、野生の血が流れているから」だかと書かれていた。キャベツや白菜をさりげなくよけて、肉を多めによそうわたしがいる。

それなら、加工肉の魅力とはなんだろうか。

ワインナーもひよいひよいと皿に移す。全部食べてやろうとは思わなかった。食べきれないからではない。スープの器には、たっぷりと肉を入れたのに。加工肉と生肉の差。意識せずとも嗅ぎ取っているから、きっとわたしはワインナーを全部は皿に取らなかったのだ。

そういえば、妹は高校の授業で、子豚が生まれてからワインナーとして買われるまでのドキュメンタリー映像を観たと嘆いていた。しばらくワインナーを食べたがらなかつたのに、今ではけろっと忘れたのか、ワインナーにも箸を伸ばす。

加工されたって肉は肉だ。生々しく肉と思わせない肉が、加工肉なのかもしれない。皮で包んでワンクッション置くことで、理性のある人間として食べられるのが、加工肉なのだ。

プールとドーナツ

土曜日の朝だからって、名古屋の地下鉄は空いちゃいなかった。

人間が限界まで詰め込まれる。ぎちぎちにドアを閉められて、電車は動く。わたしも運ばれる荷物のひとつとなって、学校へ向かった。そうだ。わたしだって土曜日でも授業がある。土曜日だから休みなんて考えは、単なる先入観でしかない。

名古屋から栄まで、東山線で五分ほど。ホームに吐き出されると、汗臭さから開放された。密着していた誰かの熱気が、まだ背中や腕にねつとりと張り付いている。

地下街を抜けて、いよいよ外へ出なければならなくなる。

手の甲を鼻に添える。

これはわたしの癖だ。一人でぼんやりしていて、そろそろ動かなければならなくなってきたとき。小学生だったわたしは、水泳の授業で、顔を水につけるのを怖がった。先生は急かす。いつまでも鼻を触っていないで、早くプールに入りなさい、と。鼻の調子が悪いふりをすれば、いつまでもたもたしても許されるような気がした。

添えた手の甲から、甘い香りがした。知っている。なんだっただろうか、この香り。日焼け止めクリームのにおい。知っているものと、似たにおいがする。ああ、そうだ。ドーナツだ、きっと。小学生のころは大好きだった、祖母が作るドーナツ。余計なものが入っていないなくて、たまごと牛乳そのものの、素朴な味がした。肌に優しいというウリ通り、本当に素朴な成分でできているのだろう。

ぐずぐず立ち止まってはいられない。わたしが泳がずに時間を稼いでしまっては、後ろに並ぶ子たちに順番が回ってこない。

太陽に差されたって、喉が渴いたって、べたつく体が気になったって、学校に行かなければならない。ここまできたのだから、重たかったまぶたをこじ開けたのだから、行こう。もう一度だけ手の甲で鼻を押さえて、深呼吸をして、太陽の下に出よう。

今年で二十一歳になるわたしは、今でも泳げない。水に顔をつけるだけでも、かなりの決心が必要だ。あのころから変わっちゃいないのかもしれない。それでも、これが癖になってよかった。朗らかな思い出とつながって、一息つく余裕が生まれたから。

リフター一万引いた

にがうり、にがうり、にがうり。

タッチパネルからひらがな四文字を探す。にがうり。白いカッターシャツと開封から二日目のエプロンが、体に馴染まない。

木曜日、午後一時半。学校からの帰宅途中であるはずの時間。今日はより一本でも早く電車に乗れるよう、競歩の勢いで帰ってきた。そして、スーパーのトレーニング用レジの前。十台並ぶレジの端っこ。新しく決まったアルバイトの研修真っ最中だ。

「あ、にがうり。これですか」

モニターからようやく見つけたひらがな四文字を指差す。にがうり。指導員のクボタニさんは、ぽちゃっとした頬を持ち上げて、わたしの手元を覗き込む。近づいた顔から、ファンデーションとシャンプーの香りが漂う。クボタニさんが頷いたのを確認して、人差し指をタッチパネルに添えた。バーコードのついていない商品は、こうしてレジに登録するらしい。ピポッと鳴って、一安心。肩の力が抜けていく。

「それじゃあ次は……」

指導用の書類を眺めていたクボタニさんが、ふと顔を上げた。こっちを見ている。なにかしただろうか。いや、わたしは指示通り、にがうりをレジに通しただけだ。クボタニさんの視線を追って、横のレジ台に振り向く。

おじいさんがいた。浅黒い肌に白い髪が目立つ。

おじいさんは、トレーニング用のものとはいえ、レジに入っているわたしの後ろ、隣のレジを素通りしていく。平日の昼下がりとあって、客足は少ない。体ごと振り向いて気づく。ここから一番奥の二つぶんだけ、レジを解放している。わたしの隣は休止中だ。

やせ細ったおじいさんの腕には、大玉のすいかが二つ。わたしとクボタニさんの視線などものともせずに運んで、どかんと段ボールに入れた。買い物をしたお客様が商品を持ち帰るときに詰める、あの段ボールに。すいかが大人しく収まっているのを確かめると、おじいさんはまたわたしの後ろを通り、売り場に戻っていく。

「……あの人、レジ通してないよね。こっちからきたもんね」

こっち、とクボタニさんが目を向けたのは、野菜売り場。そこから一番近いレジは、わたしがいるここだった。

「ですよね。通してないと思います」

休止中のレジには入れないように、普段は鎖で封じている。隣がそうでないのは……なぜだろう、きっと誰かがうっかりしていたのかもしれない。

おじいさんはパン売り場の角を曲がった。

「あの人このままパンも万引きするかもしれないから、様子見てくるね」

万引き。

返事をする間もなく、クボタニさんはサービスカウンターへ駆けていく。奥二つのレジのおばさんたちも一緒に、集まってなにかひそひそ話していた。輪の中に入ったクボタニさんは、まさ

しく「井戸端会議のおばちゃん」となった。二十代にも見えるのに、やはり中学生の子供がいるだけはある。

おばちゃんたちがあっちに行ったりこっちに走ったり、その様子をぼんやりと眺める。みんな似たような体型だ。すぐにどれがクボタニさんだかわからなくなってしまった。

しかし。万引き、か。

小さな商品をこそそそ鞄やポケットに入れ、会計をせずに平然と店を出て行く。それが万引きだと思っていた。大玉のすいかを二つも、店員の見ているところで堂々と持ち出し、さらにパンまで狙うとは。

おじいさんが曲がった角と井戸端会議を交互に見て、ぼんやり過ごす。しばらくすると、あのおじいさんがクボタニさんに手を引かれてやってきた。あの細い腕には、よそのスーパーのレジ袋がぶら下がっている。パンでぱんぱんだ。さらに小脇には、寿司の詰め合わせが三パックも抱えられていた。あれも万引きするつもりだったのか。

さっきは素通りしたレジに、おじいさんは舌打ち混じりに商品を置いた。バーコードを通していくクボタニさんは、それでも笑顔を貼り付けている。井戸端のおばちゃんたちも、遠くからひそひそ見守っている。

おじいさんはなにか喚いて一万円札を投げつけた。お釣りも受け取らずに、商品だけふんだくって帰ってしまった。クボタニさんはなにか報告があるのか、井戸端へ駆けていく。

万引きなんてテレビや小説の話だと思っていた。初めて遭遇した出来事は、知識よりうんとダイナミックだった。事実は小説より奇なり、だ。

息苦しさに目を覚ます。

おぶられているのかと思ったら、たたんで積まれた布団にのしかかっているだけだった。背中が重い。上半身を起こすと、たくさんのかが床に落ちた。タオルや下着、洋服。取り込んだもののたたむ暇がなく、放られた洗濯物、だろう。

履いていたスカートがしわになったことよりも、気になることがある。窓から突き刺す、太陽。オレンジ色の刃は、海に帰ろうとしていた。……海？ そうだ。海。汗を拭うついでに目をこする。母の実家、青森県にきていたのだっけ。

母の姉の夫、わたしのいとこの父が亡くなった。本当に、突然。前の晩までは村の祭りで大活躍していたらしい。次の日の明け方、軽く咳き込んでいたかと思えば、血を吐き出したと聞いた。夫婦の寝室は一瞬にして、血の水溜りに沈んだという。慌てて新幹線に飛び乗ったわたしたち家族四人は、おじさんが亡くなった日のうちに青森に着いた。血の水溜りの名残だろうか。家の隙間あちこちに、タオルが干されていた。

知っている人が亡くなるのは、初めての経験だった。会ったことのない親戚や、よくわからぬいつながりの誰かの葬式に行く父を見送ることはあったけれど。

梅雨みたいだと思っていたのに。しとしとしくしく、鼻をすする音がずっとずっと絶え間なく、どこからもどこからも聞こえてくるような。止まない雨はない、なんて言葉がばかのうわ言に感じるようだ。

二階建ての家のどこを歩いても、大勢の知らない人が足音を立てていた。特に一階は騒がしい。あれはどこだ、これはどうした、それはそうじゃない。あっちへ運べ、こっちに持つていけ、誰は呼んだのか。人がたくさんいるし、ひっきりなしにくるから、家の中でも化粧をしていなさい。母はそう言ったきり、知らない人に溶けてしまった。

手伝おうにもやることがなかった。できることも、ない。手にした端から、どこかの家の肝っ玉母ちゃんが、かっさらう。年の近いいともおろおろしながら、けれど友だちやら誰やらがくるたびに、しんみりとなにかを話していた。あれはあれで忙しそうだ。腫れたまぶたが重たいようで、持ち上げるためにまつ毛をつけて、しばしばさせている。

それでわたしは仕方なく、二階で息を潜めていたのだ。岐阜の自宅から持ってきた本を読んでいた。ここだけ時が止まっている、あの夫婦の寝室で。

おじさんと最後に会ったのは五年も前だ。なにか会話をしただろうけれど覚えていない。どんな仕事をしていたのかも、はっきりとわからない。「ある意味ではデザインの仕事になる」職に就いていると、教わったことはある。消防団にも所属していたから、家にいる時間はわずかだ。肩の力の抜ける母の実家で、唯一背筋を伸ばしてしまう対象だった。

家にいなくても、もう帰ってこないと言われても、目を覚まさないとしても。理解するのが難しい。遺体の前に座ったときも、なぜ母が激しく泣き出したのか、首を傾げてしまった。だからこうしてこの部屋で、のうのうと本を読める。おまけにいつの間にか眠ってしまえるのだ。

時は止まっているくせに、時計はしっかり動いていた。あと五分で五時になる。そういえば、

五時から和尚さんがきて、なんぞかんぞあると誰かが言っていた。その和尚さんは元ヤンキーだとかで、肝っ玉母ちゃんたちは盛り上がっていた。

また布団に抱きついて眠ったら、どうなるだろう。一階は秋の森だ。冬ごもりの準備に必死な動物たちが、せかせか動き詰めなのだ。あんなところに、馴染めるか？

まぶたを閉ざしてみたけれど、喉の渴きが気になって、うまく寝付けそうにない。元ヤンキーの和尚さんにも興味がある。

べたべたと音を鳴らしながら、階段を降りる。水を飲んだら頭も冴えて、現実に戻れるかも知れない。おじさんの旅立った、リアルな場所に。馴染まなきゃならない。

魂の行き先、夢うつつ

夢だとはっきりわかる夢を見たのは、とても久しぶりだった。



つづいたら崩れそうな家が並ぶ道を、すすけた着物姿で走っていた。白がくすんだのか茶色に年季が入ったのか、自分の着ているものなのに、わからない。裸足の砂利道が痛くなかったから、やっぱり夢だ。

砂埃が立ち込める外にはわたししかいない。ちらほらと声が漏れている家もあるから、まったく人がいないわけではないようだ。声といっても、涙交じりだったり怒鳴っていたり、楽しい雰囲気ではなさそうで、わたしの歩幅は大きくなる。

寝る前にテレビを観ていたからだと、夢の中なのに冷静に思った。録画しておいた大河ドラマと、タイムスリップもののコメディドラマ、チャンネルを変えた先のドキュメンタリー。ドキュメンタリー番組では、びっくりするけど実在する村の特集を放送していた。そういうたった村はたいてい海の向こうや、山奥や谷の底にある。

くたびれた住宅街はいつの間にか終わっていた。代わりに目の前に広がっているのは、だだっ広い縁。小高い丘が見える。てっぺんにたくましく立つ太い木の幹に、誰かがもたれているのも確認できた。駆け足で近づく。水色、黄色、橙、桃色の継ぎはぎの着物を身にまとった、たぶん男の人だ。短い髪は赤い。年は同じくらいか、下か。背はさほど高くなくても、肩ががっしりしている。

「あの、すみません」

声をかけると振り向いてくれた。彼は首元にヘッドフォンをかけている。コードはどこにもつながっていない。宙ぶらりんのまま、風に揺れる。

「ここから出たいんです。道教えてください」

出たい？ 言ってから、あたりを見渡す。

どこからどこに？

細かく草が生い茂っていた場所に、いつしか高く重たい壁がそびえ立っている。男の人がもたれているものも、分厚い扉に変わっていた。圧迫感のある赤い扉に、金のドアノブが息を詰ませる。

男の人はわたしの目を覗いて、口を閉じたまま、頬を持ち上げる。大きな瞳をまたたかせて、歌うような軽やかさで言う。

「それじゃあ、死なないと。この扉をくぐるには、死んで魂になって、すり抜けていくしかないんだよ」

ヘッドフォンのコードを指先に巻きつけて遊び、彼は続ける。

「うーん、でもたいていみんな、死にたがらないんだよね。しょうがないから、おれがきみを兵糧攻めにしてあげる」

そういえばタイムスリップコメディが、ちょうど兵糧攻めの話だった。夢の中にいながら、やはりわたしは冷静に、現実の自分を把握している。

それにしても、ヘッドフォンの彼一人の力だけで、兵糧攻めは成り立つのだろうか。日本史にひどく疎いから、首を傾げてしまう。ぼんやりとドラマの内容を思い浮かべているうちに、いいようにうなずかされて、肩を抱かれる。

「それじゃ、こっちね」



こっち、が、どこだったのか。

目が覚めた。わたしは自室の布団にいた。つけっ放しの豆電球がおぼろげに、閉め切った部屋を包んでいる。布団をめくると、ちゃんと厚ぼったいパジャマを着ていた。

夢と現実。死んだら扉のあっち側。夢の中で死んだ人の魂は、現実世界に流れ着いて、こっちで生まれ変わるものかもしれない。

また会おう、会えるまで。

また会おう、会えるまで。

<http://p.booklog.jp/book/97904>

著者：うーさー

<http://p.booklog.jp/users/gohantaberu13/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/97904>

ブクログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/97904>

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブクログ